

変わる日本の「暮らし」と「まち」

本を通して人をつなげる
団地のなかのブックカフェ

アセット戦略推進部
ブックカフェイベント「TOUR」
(2020年・令和2年)

阿部民子

text by Tamiko Aoe

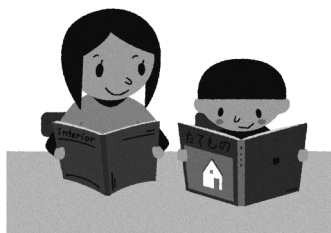


illustration: Shigeyuki Sakata

本に囲まれておいしいコーヒーを飲みながら、お気に入りの一冊をゆったりと楽しむ。近年、おしゃれなブックカフェが各地に誕生し、人気を集めている。

そんなカフェを団地のなかにつくるといふユニークなイベントが、2月12日から16日に開かれた。舞台は、京王相模原線南大沢駅から徒歩7分の地に広がるURの賃貸住宅、多摩ニュータウンベルコリーヌ南大沢だ。もともとこの団地では、無印良品と組んで改修した「MUJEE×UR団地リ

ノベーションプロジェクト」の住宅が若者を中心に人気を集めている。今回のカフェを催した集会所も、MUJEE×URによって提案された、木の良さを生かしたりラックスできる空間だ。

この団地の管理を所管している多摩エリア経営部との連携により開催された「TOUR（ツアー）」と名付けられたイベントでは、集会所内に暮らしなどにまつわる本を集めた本棚を設置。ギターの演奏とともに絵本を読み聞かせる「歌い聞かせ」では、音読に合わ



絵本をギターの演奏に合わせて歌い聞かせ。子どもたちも真剣な眼差し。

「このイベントは、出版流通の大手である日販（日本出版販売）さんとURが協力して開催しました。もともと日販さんとは、土地の販売を通してつながりがありました。が、今回、URの持っている団地を活用して、何か新しいことを共創でやれないかとお話したのがきっかけです。今回のイベントは、本を介して我々の課題である『コミュニティの形成』をはかろう、ということの日販さんが企画を立て、我々が場所を提供することで実現しました」と話すのは、URアセット戦略推進部の八木下雄介だ。

アセット戦略推進部は、平成30年4月に誕生した新しい部署。URが全国に持つさまざまな賃貸住宅などの資産を有効活用し、民間企業と共創しながら新しい取り組みなどを行うことも業務のひとつだ。「TOUR」はもともと令和2年度から本格的な活動を開始する予定で、今回のイベントはそのプレ開催となった。

日販側の担当となった染谷拓郎さんは、同社のブックディレクションブランド「YOURS BOOK STORE」のプランニングディレ

クターだ。「人と本をつないでいく」をコンセプトに、書店以外での本とのふれあい、本を軸にした企画・プロデュース・イベント開催など、さまざまな切り口で本のある場所づくりを展開している。「今回のイベントでは、お子様、子育て世代、熟年層の方といった3世代のご利用客を想定し、それぞれの方が楽しめるコンテンツを考えました。それに加えて、世代に関係なく楽しめるものや意見交換できる機会を作ることも意識して企画を立てました」と、イベントの意図を語る。

団地で開催することの意義については「会場が居住地から近いのが、一番の特徴ですね。わざわざ行くという行為ではないため、日常と非日常のラインが近く、あまり特別感をだすすぎないような演出を考えました」と答える。

イベントでは、平日は落ち着いて本を読む人が多く、土日は子ども連れが多く訪れ、それぞれの時間をゆったり過ごしただけでなく、見知らぬ人どうしが話をしていたり、子どもと一緒に本を読むなどして、イベントの余韻を楽しんで

いる様子が印象的だったという。当日は、MUJEE×URでリノベーションした住宅の内覧会も同時開催。アートを楽しむことをテーマにした部屋は、廊下の壁を取り払った後の様子を活かして、本やポストカードが飾れるギャラリースペースに変えたスタイリッシュな空間。部屋には無印良品のコーディネートが選んだインテリアや環境といった、暮らしにまつわる20冊の本が置かれ、本と楽しむ暮らしを体験できる、と訪れる人に好評だった。

民間と共創して課題を解決

「アセット戦略推進部では、防災や減災、子育て、高齢化、外国人など、さまざまな社会課題を民間企業の方と連携しながら解決できないか、という大きなテーマに取り組んでいます。URは全国に賃貸住宅がありますが、それぞれに求められていることが違います。そうした課題を、団地をよく知る団地マネージャーからくみ取り、地域の皆様に喜んでもらえるような取り組みを、これからも考えていきたい」と八木下は話す。

たりと、楽しい催しも盛りだくさん。本を介して団地に住む人同士、来場者をつなぎ、若者や子供連れの方から高齢の方まで、多くの人でにぎわった。

本と楽しむ暮らしを提案

日販の染谷さんも「全国に団地や土地を保有しているURさんだからこそ、こうした取り組みを全国に広げていけるのだと思います。コンテンツや企画を持っている我々のような事業者との相性が非常によいのではないのでしょうか。今後はより大きな区画の全体プロデュースなど、さまざまな切り口で一緒にしたいですね」と、URと組むことの面白みを話す。

イベントでは、「普段は子どもとあわただしく過ごしているけど、今日はいつもと違うほっとした時間が過ごせた」「人と触れ合っただけで時間が楽しかった」「いつも読みたかった本があつて、うれしかった」との声も寄せられた。好評に因應で、今後は年回数ほど開催する予定もあるという。本を介して人とならがり、思いがけない本に出合っただけで世界が広がる。本好きの一人として、そんな機会が増えるのが素直にうれしい。

街に、ルネッサンス

 UR 都市機構

一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます

【企画制作】新潮社